



それは、とある天気の良い、晴れ晴れとした一日での事。

本当の狛犬、最後の種族の生き残りとなった、ビリーブ・ザ・セレモニー。通称ビリーブ。ビリーブは1人、破魔矢に跨り海を渡っていた。

『今日はいい天気。そろそろ島に戻って、蔵書の整理をし始めないといけませんね。』

ビリーブは狛犬の式服である袴スタイルのまま、海を1人渡っていた。

ビリーブが向かっている先は、生まれ故郷であるセレモニーライン。

今となっては、ビリーブが狛犬族最後の生き残り。今となっては年も関係なく、島の管理が任されているのだ。

以前までは、島に帰ればビリーブの家族達がいた。

だが最近、魔力によってしばらく世界に留まっていた家族達だったが、そろそろ時期も時期のため、島にはもう誰もいない。

でもビリーブは職務をまっとうし、きちんと仕事をこなしていた。

ビリーブはセレモニーラインに到着すると、破魔矢から降り、島に足をつけた。

そして、以前自分が住んでいた家に向かって行った。

今では島に漂っていた瘴気は無く、正常な空気に包まれていた。

ビリーブが以前、本当の狛犬になった時、全ての瘴気を払い、綺麗な空気となっていた。

それだけ、ビリーブは修行の成果と力を得たことが証明されているのだ。

本日のビリーブの仕事は、家にある大量の古文書の整理だ。

ビリーブは家の土手で下駄を脱ぎ、廊下を歩いて、書類の置かれている部屋に向かって行った。

部屋の前へ到着すると、ビリーブは部屋を仕切っている襖を開けた。

すると、貯まりに貯まっていたホコリが漏れ出し、ビリーブを襲った。

「！！クシュン！」

ビリーブは突如襲い掛かって来たホコリに、思わずくしゃみをした。

『うーん、しばらく放置していたこともあって、ちょっとホコリっぽいですね・・・』

ビリーブは少々ホコリに怯んだものの、事前に持ってきたマスクを出し装着し、ハタキを手に部

屋の中へ入って行った。

ビリーブの父親やその先祖達が残した、とても貴重な資料の山々。

呪術関係もあれば、歴史のことが書かれた物。そして、ビリーブの父親が得意としていた、夢に関する書類も置かれていた。

ビリーブはそんな書類を読むことが好きで、修行をする前、よく父親の膝の上に座り読んでいたのだ。

読めない字があれば、いつでも父親に聞くことも出来た。そして、いつでも自分が最も信頼していた父親が、ビリーブのそばにいてくれたのだ。

ビリーブはそんな暖かい愛情を受け、とても優しい性格になったのかもしれない。

パタパタパタ・・・

「うーん、やっぱりホコリが貯まっていますね。どれくらい放置してたんですっけ・・・」

ビリーブはハタキを手に部屋中を廻り、貯まっているホコリに退場を願って掃除をしていた。

蔵書整理の前には、まずはお掃除。

ビリーブは誰からも頼まれていない、そして文句も言わず、サササッと片付けていた。

そして大量のホコリに退場してもらい、一通り綺麗になったのは、それから1時間後・・・

「ふう。」

ビリーブはつけていたマスクを取り、部屋を見渡した。

すると、来た時の汚さは部屋には無く、とても綺麗になっていた。

窓も開けてあるため、もうホコリっぽくも無く、とても清潔な空間となっていた。

敏感なビリーブの鼻は、ホコリに反応しなくなっていた。

「よし、コレでお掃除はOKですね。次は書類整理でしたね。」

ビリーブは使っていたハタキとマスクを一回廊下へ置き、濡れ雑巾が入ったバケツと綺麗な布巾を手に取り、再び部屋の中へと入って行った。

書類は全部あわせて約何百、何千冊といえるほどの山のため、こちらは一筋縄では行かないお掃除だった。

でもビリーブは一通り書類の山を作り、一つ一つ綺麗に布巾で拭き、濡れ雑巾で棚を掃除していた。

「あ。」

ビリーブは一回掃除の手を止め、1つの書類を手にとった。
書類には、見慣れない文字が書かれていた。

「コレって、お父さんが書いた書類だ。懐かしいな。」

ビリーブは持っていた書類を開け、内容を読み始めた。

「・・・フムフム。 こういう使い方もあるんですね。 お父さんはやっぱり凄いな〜」

ビリーブは読んでいた書類を閉じ、棚へと戻した。

それからしばらく、懐かしい書類や気になった書類を手に取り、楽しく掃除をしていた。だが掃除の手を止めてしまうため、中々作業は進まず、いつの間にか外は黄昏時の空の色へと変わっていた。

「あれ？ もうこんな時間ですか・・・ 書類を読んでたツケが廻ってきちゃいましたね・・・」

ビリーブは読んでいた書類を閉じ、とりあえず出ている書類を棚へと戻した。

「えっと、コレはこっち。 コレはココっと。 コレは、あれ？」

ビリーブは書類を片付けていると、不意に目に入った書類の表紙を見て、手を止めた。

「こんなの、ありましたっけ？ 今までここにある書類は全部読んだと思ってたのに・・・」

ビリーブは気になった書類の表と裏を、しばらく見ていた。

「気になる書類。 後で読んで見ましょうか。」

ビリーブは気になった書類を一回下へと置き、残りの書類を片付けた。

それからしばらくして、書類は全て棚へと戻り、部屋は綺麗になった。だが、その作業に時間を費やしすぎたのか、外はすでに夜となっていた。

「ふう、コレでよしっと。 さてと。」

ビリーブは先ほどまで使っていた掃除道具と、気になった書類を手を持ち、その場から離れた。掃除用具を規定の場所へと片付け、ビリーブは先ほどの書類を持って、今の住居であるストレンジャーの家のある、テトラクリスタルアイランドへと戻って行った。

「ただいま戻りましたー」

「おかえり、ビリーブ。」

ビリーブは数十分の空の旅を終え、今の住居であるストレンジャーの家へと戻ってきた。

「掃除、どうだった？」

「全部片付け終わりました。でも書類とかを時々読んでしまって、思った以上に時間を使ってしまいました。」

ビリーブはストレンジャーからの問いかけに、多少照れつつそう言った。

「そっか。？ それは？」

ストレンジャーはふと、ビリーブの持っていた書類を目にし、問いかけた。

「ああ、コレですか？掃除をしてて、この書類は見たことが無かったので、ちょっと持ち出してきたんです。」

「いいのか？勝手に持ち出して。」

「今では許可を言う方がいらっやいませんので、多分大丈夫です。」

ビリーブはそう言うと、ストレンジャーは少々苦笑した。

「？ どうしました？」

「いいや、ビリーブもちょっと悪戯っぽい事を言うんだなって、思ってな。」

ストレンジャーは笑ったまま、ビリーブに言った。

「エヘヘ、ちょっと自分じゃなかったみたいですね。」

「ま、いいんじゃないか？俺達まだ子供だからな。」

「そうですね。」

ストレンジャーからの問いかけに、ビリーブは相槌を打つと、二人は苦笑した。

その後、ビリーブはシャワーを浴び終わると、夕飯を終え、ストレンジャーの部屋で書類を読んでいた。

部屋の電気は使わず、月明かりと月影草の光を頼りに読んでいた。

『フムフム。コレって、歴史書だったんですね。ご先祖様が書いたものなのでしょうか・・・』

ビリーブは書類を読みつつ、何の書類なのかを把握しつつ読んでいた。

『こんなことが過去に起こっていたんですね。ん？』

ビリーブはふと目を留め、気になる所を目にした。

《全てはロキとアングルボダの間に生まれた、3人の子供達がこの鍵『ラグナロク』を握る。》
『ラグナロク、ロキとアングルボダ。コレって、過去の大戦争の事ですよ。神々を危機へと追いやった、悲惨な争い。』

《そしてもっとも注意すべき存在は、3人兄弟の長男。フェンリルだ。》
『フェンリルって・・・マスター？』

ビリーブは書類を読み、気になる点を見つけた。

『確か僕達のマスターって、フェンリルを元にして作られた存在、ラプソディ・ウルフが仮の姿。それにマスターって、フェンリルの意思を告ぎたいって、言ってましたっけ・・・』

ビリーブはふと、ラプソディとの過去のやり取りを思い出し、そう思った。

『・・・もしかして、この書類って！』

ビリーブはふと嫌な予感がし、急いでページをめくり、目を通した。
そして、見つけてしまった。

《この崩壊劇はいずれ、この世界でも引き起こされる。フェンリルの存在が作られた、その時。》
『！！！！』

ビリーブはこの書類の本当の姿を知った。

『コレ！ 歴史書じゃない！ 預言書だ！！』

ビリーブは少々驚きつつ落ち着き、この書類に書かれている事を一時整理した。

『ラグナロクが起こるためには、ロキとアングルボダ、そしてその子供達であるフェンリル、ヨムンガルド、ヘルがそろふ事。そして、フェンリルがその引き金を引く。もしかしてマスターは、この戦争を引き起こすための鍵になってしまうんじゃ・・・』

ビリーブは少々怖くなりつつ、冷静に事を整理していた。

『この預言書が本物だとしたら、ラグナロクは始まる。だとしたら、このラグナロクを終わらせる方法を調べないと！』

ビリーブは再び書類を開け、解決策を捜した。

《このラグナロクが起こった時、私は子孫達にこの言葉を残す。『全てはそのフェンリルの怒りがなくならない限り、この世界は崩壊へと向かう。怒りが無くなった時、この事を止める事が可能となると。』》

『フェンリルの怒りが治まると、ラグナロクは終わるんですね。でもその怒りが止まらなければ、この世界は本当に無くなる・・・あの時以上に、危険な駆け引きがあるんですね。』

ビリーブは解決策の目処が立つと、書類を閉じた。

『とりあえず、マスターであるラプソディがおかしくならない限り、ラグナロクの心配は、無いですよ・・・』

ビリーブは少々心配しつつ、空を見た。

夜予言

一方、こちらはビリーブ達のマスター。 ラプソディの経営するカフェ。
今は夜のため、営業の後始末をしていた。

「ふう、清掃終了っと。」

ラプソディは卓の片付けや皿洗い当を終え、一段落着いていた。

「えっと、洗い残しはっと。 あれ？」

ラプソディは皿洗いで使っているシンクに、洗い残しの物を見つけた。
それはナイフだった。

「あらら、物騒なものを洗い残してしまいましたね。 洗っちゃわないと。」

ラプソディはナイフを手に取り、水を流してスポンジで洗い始めた。

「フンフンフ〜ン♪ イタッ・・・」

ラプソディはナイフを洗っていると、少々手を動かし間違え、指の皮膚を切ってしまった。

「あっちゃー やっちゃいました・・・」

ラプソディはナイフとスポンジを一回シンクへ置き、傷口を水で洗った。

「ばんそうこう、何処にあったっけ・・・」

ラプソディは血を一通り流し終え、店においてある救急箱のある休憩室へと向かって行った。

「えーっと、あ、ありました。」

ラプソディは休憩室の棚を見て救急箱を探し、物を発見した。

「ばんそうこうと。 コレですね。」

ラプソディは救急箱からばんそうこうを取り出し、指に張った。

「コレでよしと。 ちょっと傷口が大きかったかな・・・」

ラプソディはばんそうこうをした指を見つつ、そう思った。

ばんそうこうには、ちょっと血の色がにじんでいた。

すると、

ドクンッ・・・

《我ノ事ヲ殺シ、キサマラニ我ノ怒リガワカルカ・・・》

耳元で1回、心臓の鼓動が大きく聞こえ、何処からか声がした。

『え？』

ラプソディはふと、聞こえた声の主を探すために部屋を見渡した。

だが部屋には誰もいなかった。

『気のせい、でしょうか・・・』

ラプソディは少々怖くなりつつも、休憩室に布団を引き、布団の中へ。

だが、中々寝付けなかった。

『何か・・・ 血が熱い・・・』

ラプソディは少々顔に熱があるような感覚をしつつ、そのまま目を閉じて寝てしまった。

— E N D —